

森の文化力

「地域」の「ひと」と「くらし」を支える森林―

研究ディレクター 堀靖人

森林は、地上における最大の生態系で、その存在によって私たち人間を含む生き物に多くの有形無形の恵み（生態系サービスと呼ばれます）をもたらしています。国連環境計画によってまとめられた「生態系と生物多様性の経済学（通称TEEB）」報告書によると、生態系サービスには、食料や水、木材などを供給する「供給サービス」、二酸化炭素を固定したり水質を安定させる「調整サービス」、多様な生き物たちの住みかを提供したり遺伝的多様性を維持する「生態・生育地サービス」のほかに、自然とのふれあいを通じて人間社会を豊かにする「文化的サービス」が含まれます。

ふつう、「生態系サービス」を提供する森林といった場合には、人の手が入っていない原生的な森林をイメージしがちです。しかし、人の手が入っていない原生的な森林は地球上にはほとんどなく、何らかの人為が加えられてきたと言っても過言ではありません。むしろ、人の手が入ることではじめて生み出される「生態系サービス」が「文化的サービス」で、地域の自然や文化とのふれ合いによって得られる恵みが「文化的サービス」といえます。

人々は、森林を利用し続ける中で、長い時間をかけて地域固有の文化を育み、美しい景観を作り出し、維持してきました。このことは、地域に住む人々の誇りであり、精神的な拠り所となっています。また、地元の人々に守られてきた地域固有の文化や景観は、そこを訪れる人々をも魅了します。さらに、自然の中での活動は、心と体を健やかにするだけではなく、地域固有の生活の成り立ちや自然と人々の本来の関係を想起させ、理解を深める機会にもなります。

森林は、地域の人々と生活を支え、逆に人々の生活が森林を支えてきました。この相互の持続的関係が、文化的な豊かさの源泉と言えるでしょう。本特集では、「もり」と「ひと」と「くらし」の間で紡がれてきた関係としての「森の文化力」について紹介します。



埼玉県三富地域の市民による里山管理の様子